

天宮, 1994. 3月 (1994)

IAMAP/TAIS

LOC Grant 顛末記—登録小委員会雑感—

安成哲三*

会議が始まるまでは、正直言ってこれほど楽な係もあるまいと思っていた。登録状況は、事務局が常に把握しておいてくれるので、会議前のこの係の仕事と言えば、いわゆる LOC Grant による登録料免除を含む滞在（費）補助の申請をした参加希望者が集まったところで、もう一人の係の村上勝人氏（気象研）と相談して、バサバサと大なたをふるって補助対象者を絞り込むことぐらいであった。確かに誰を落し、誰を通すかは、非常に難しく、微妙な問題でもある。業績や研究における“知名度”のようなものを基準にすると、マイナーな発展途上国からの申請はほとんど落ちてしまうことになるし、気象学全体の国際会議だからということで、妙に国のバランスなどを考えてしまうと、中国やロシア、インドといった申請大国(?)からの申請者は非常に不利になってしまう。ちなみに IAMAP における申請者数の国別ランキングは、第1表のようになっている。結局は日本のお家芸、玉虫色の判定、あるいはいま話題の「並立制(?)」による決定ということになってしまう。採択結果は第1表に併記されている。

さて、いざ会議が始まると、えらい役を引き受けてしまったと後悔するはめになった。そもそも今回の参加補助における大問題は、限られた Grant で、できるだけ多くの人をサポートする、という哲学にもとづき、現ナマはできるだけ渡さずに、安い宿舎にできるだけ多くの人をまとめて収容する、という戦略から派生した。何回かの実行委員会での議論を経て出したこの哲学自体は、こういう大会議の性格上、ひとつの正しい選択であろう。戦略も机上のプランの段階では、決して悪いものではなかった。宿舎も、事務局のご苦勞により、ややシニア向けの某研修センターと、一般向けの某ユースホステルというふたつのランクが確保できた。あとはお客さんを待つばかり。

パニックは、会議前日の夜に始まった。まず、某申請大国から第一陣が大挙して登録台に現れた。それぞ

第1表 IAMAP LOC Grant
国別申請者数と採択者数

国名	申請者数	採択者数
香港	2	1
ケニア	1	1
イタリア	1	
インド	15	10
中国	41	29
パキスタン	1	
マレーシア	1	1
トンガ	1	
オーストラリア	1	
ルーマニア	1	1
P. N. G.	2	
ロシア	9	4
台湾	1	1
イラン	1	1
ネパール	1	
U. S. A.	2	
エストニア	1	1
オーストリア	1	
ベニン	1	
合計	84	50

れの補助対象者のリストには申請にしたがった到着日、出国日が記載されており、こちらはこのリストに従って、宿舎の予約を入れておいた。ところが、この到着日を無視して早めに現れた人、補助対象になっていないのに、友達が行くから自分もと、ユースホステルに泊まってしまう人、そのために後からやってきて泊まれなくなって文句を言ってくる人、……。パソコンによって見事にできあがっていた事務局の予約リストは、会議初日にして、役立たずになってしまった。予定通りにちゃんと来る、変更のあった場合は事前に連絡する、などという日本的(?)価値観は、かならずしも普遍的なものではないことを痛感させられた。おかげで、はじめの2、3日は、会議はそっちのけで旅行エージェント業よろしく、お客の苦情を聞いて処理できることはし、できないことはただなだめるという役に忙殺された。夜も8時頃となり、やっと今日も終わったかと思ったら電話が鳴り、中国からのお1人か

* Tetsuzo Yasunari, 筑波大学地球科学系。

ら、泊まれるはずのユースにベッドが無いという。誰かがかってに泊まっているためであった。事務局の喜多さんと、宿にあぶれたこの人の宿泊先を求めてとにかく電話をかけまくり、やっと空いていたあやしげな安いビジネスホテルにタクシーでご案内するといった残業までついていた。

おまけに、ユースに一泊して会場にやってきた某国の某教授からは、「10人相部屋とはひどいではないか。飯もひどい。これが先進国日本のやることか。」と、徹底的に文句を言われた。確かにユースホステルは、はっきり言ってよくなかった。しかし、この教授の怒りは、部屋のひどさもさることながら、下っ端の若い研究者と同じところに入れられたという不愉快さが、先に立っていたようだ。年と身分による上下関係が伝統的に日本以上に強いこの国から来た教授にとって、この待遇は我慢ならなかったようだ。こういう人は、できるだけもう1つの研修センターに用意しておいたはずなのだが、たまたまそちらも満室でユースに回されたのであろう。ところが一方、IAHSのLOC Grantの補助を受けて来られた同じ国のさらにシニアな立場の初老の教授と、中華街でたまたま夕食を一緒に囲む機会があった。宿を聞くと、ユースホステルだと言われる。くだんの件もあったので、恐縮してひどいところに入ってもらい誠に申し訳ないと頭を下げると、「いや、私は若い人と一緒ににぎやかにやるのが好きですか

ら、気にしてません。楽しんでますよ。」といわれた。ホツとすると同時に、その教授への尊敬の念がさらに強まったのである。

ともあれ、この係をやってつくづく感じたのは、「先進国」日本のアンバランスな後進性であった。超一級のホテル付きの豪華な国際会議場で会議を開きながら、そのホテルに泊まる、あるいは泊まれる参加者などはほとんどおらず、会議に招待した多くの外国人には、古びたユースの蚕棚のベッドで寝泊まりしてもらわざるを得ないのである。今回のこの「補助+宿」問題は、予算の少なさ、首都圏での物価・ホテル代の異常な高さ、まともに泊まれる宿の少なさなど、さまざまな悪条件が重なった結果ではあるが、これは偶然そうだったのではなく、日本の、特に首都圏で、貧乏学会が大国際会議を開こうとした時に必然的に起こる構造的な問題として現れたといえる。少額でも現ナマを渡して後は勝手にしてもらおう方がよっぽど楽でよかったとも思ったが、今度は、この額ではまともに泊まらないという不満や、この額でも泊まれる宿を紹介せよという無理難題を、きつと抱え込んでいたという気がする。

ともあれ、一時はどうなることかと思ったこの問題も、会議が進むにつれ次第に落ち着いていった。事務局の奮闘のたまものであろう。



LOC Grant の受付。